

草薙ゼミナール

2001 年度 卒業論文集 (下巻)

2002 年 3 月

大阪経済大学 経営情報学部

経営情報学科

指導教員：草薙 信照

草薙ゼミナール 2001年度 卒業論文集 (下巻)

【目 次】

指導教員 草薙 信照 2001年度卒業論文集の刊行に寄せて

M985008 井原 佑介 住居における快適性に関する考察

M985013 大槻 隆次 びわこ空港の再検証

M985018 小田垣 学 コンピュータ犯罪とサイバーポリスに関する研究

M985047 豊田 可織 広告におけるインターネットの役割

M985070 前中 美紀 都市交通における公共交通のあり方について

M985129 小石 理絵 ITがもたらす地球に優しい「クルマ社会」の姿

M985139 下村 美歌子 ネチケット認識の実態に関する研究

M985144 武田 優子 家庭用ゲーム機の販売に関する考察

M985191 榊岡 由紀子 栄養ドリンク市場に関する研究

M985197 室内 昌之 仕事におけるパソコンの生産性に関する研究

M985202 山口 晴代 大震災による神戸市産業への影響に関する研究

M985262 長屋 庄子 無糖茶飲料のブームに関する考察

M985264 西尾 裕美 USJが大阪経済に与える影響に関する考察

M985269 平岡 利之 インターネットの双方向性に着目した広告のあり方に関する研究

M985329 横田 祐一郎 人間の欲求を利用したマーケティングに関する研究

M005954 堀 隆典 インターネット上のトラブルに関する研究

【上巻目次】

- 指導教員 草薙 信照 2001年度卒業論文集の刊行に寄せて
- M985059 平藤 嘉展 ブロードバンドビジネスに関する考察
- M985083 吉田 春香 ビジュアル系バンドとそのファンについての考察
- M985094 井上 沙江子 カラーセラピーの効果に関する考察
- M985109 岡野 亜伊 音楽の時代性に関する考察
- M985120 北 真恵美 関西人論の研究～個性の認識とメディアの影響～
- M985136 柴田 高志 3 DCG作品「Warp」
- M985140 末澤 篤 主体性を育む情報教育の研究
(1)課題解決型マルチメディア教材の開発
- M985141 杉本 修一 主体性を育む情報教育の研究
(2)情報教育における今後の課題
- M985168 桧垣 健太郎 Web環境を利用した学内専用オークションシステムの開発
(2)システムの利便性に関する分析と評価
- M985170 樋口 勝彦 電子機器を利用した選挙システムの現状と課題に関する考察
- M985172 平 尚子 携帯電話の普及が市民生活に及ぼす影響に関する考察
- M985173 廣石 朱音 21世紀型少子・高齢社会 ～長寿社会を求めて～
- M985185 堀江 圭介 インターネットによる街づくりの可能性に関する考察
- M985186 本位田 真貴 Web環境を利用した学内専用オークションシステムの開発
(1)システム的设计と構築
- M985200 柳田 晴美 情報弱者とパソコンの共生
- M985239 来島 克也 愛媛県松山市についての考察 ～若者はどう考えているか～
- M985242 佐多 慶一 パソコン廃棄物問題に関する考察
- M985246 下迫 学 育児休業制度に関する研究
- M985278 細川 晶弘 遠隔医療の現状と可能性

「2001年度卒業論文集の刊行に寄せて」

2002年3月

指導教員 草薙 信照

草薙ゼミの第4期生となる諸君は、“経営情報学部・経営情報学科”の第2期生でもある。そして草薙ゼミとしては初めて、総勢37名の2ゼミ構成となった学年でもあった。

「インターネットを利用した応用情報システムの研究」という看板を掲げて募集したところ、女子だけでも18名、合計44名の応募をいただき、半数以上を断るのは心苦しいと考えて36名を選抜したのが間違いの始まりであった（その後、編入生1名を加えて37名になった）。

2ゼミの運営は思いのほか困難で、1回のゼミコンパは2回の宴会を意味するし、ゼミ合宿ともなればバス1台分に匹敵する大移動となった。また、個別指導に1人あたり15分としても合計9時間、卒業研究の指導にいたっては1人に1時間はかかるので合計36時間・・・本当にしんどかったと思いつつも、今となってはそれも良い思い出であって、多くの学生に接することができたという喜びを感じている。ひとつの心残りは、学生一人ひとりに割ける時間が少なくなったのは事実で、その分だけ配慮が至らなかったことは否定できない、という点である。この場を借りてお詫びしておきたい。

さて、卒業論文の総評である。今年度のテーマを見渡すと、例年以上に多方面の領域に広がっている。これは人数が多かったことに加えて、メンバーが個性派ぞろいであったことの表われでもあるといえそうである。このような多様性は、各人が各領域において強い問題意識を持って取り組んだ結果であり、いずれも私の知的好奇心をくすぐるに十分なものであった。このような多岐にわたるテーマについて諸君と一緒に考え議論する機会を得られたことは、私にとっても貴重な経験であり、そういう意味でも諸君には感謝している。

毎年、完成した後だからこそ言うことであるが、卒業論文の意義として私がもっとも重要だと考えることは、諸君にとって、1つのテーマについてこれほど真剣に取り組んで研究することは、おそらく初めての貴重な経験になったであろう、という点である。したがって、一生懸命になって取り組んだという気持ちさえ伝わってくれば、たとえその論文が考えていたことの半分しか言い表せていなくても、あるいは参考文献からの引用の寄せ集めであったとしても、何物にも替え難い貴重な成果であると言える、と考えている。個々の論文の評価は、研究者本人である学生諸君、そして読者の方々に委ねたいと思う。

大学生活4年間の集大成として、卒業研究という大仕事にやり遂げたという経験は、必ずや社会人になって仕事をする際の自信につながるであろう。そして10年後あるいは20年後になれば、良き思い出として懐かしく鮮やかによみがえるに違いない。

最後になるが、今後は同じ社会人として対等に、あるいは逆に私を導いてくれるようなつきあいをしていけるならば、これにまさる幸せはないと思う。今後の諸君の健闘を期待する。